

本をめぐる環境はここ数年で激変した。かく言う私も新本はインターネット上の本屋であるアマゾンが楽天。古本探しも今はインターネット上の古書店である「日本の古本屋」あたりで最低価格の店を探すようになった。本探しの効率や経済性は格段によく言ったと言っている。

が、「本を読む」という、このきわめて人間的な行為は、いつでも効率や経済性のみで説明できるものではないと思う。

「ネクタイの柄は他人に選んでもらえ」という話をきいたことがある。自分の趣味嗜好ばかりを追い続けていると、いつしかワンパターンに陥って、本来はファッショナブルな人であっても、全然ファッショナブルには見えなくなってしまうということのようだ。

読書の世界でも同じことが言えると思う。自分にぴったり合った本を安く、早く、確実に選べるのはインターネット書店や古書店の強みだろうが、この方法だと本当に自分を新しい世界にいざなってくれるような「衝撃の本」と出会う機会が少なくなる。

しかし、街角の本屋にでかけてみれば、学生時代に好きだった作家がなぜか園芸の本を書いていたり、堅物と思っていた学者が小説を書いていた、欲しくても買えないでいた全集が文庫本で出ていたりするのを見つけたことができる。

大きな本屋ならいいというわけでもない。例えば、勤務先の近くにあるひつじ書房という児童書専門店は、店構えは小さくても、趣味のいい本がしつかりと選ばれていて、あまり有名でない出版社の本でもきちんとは揃っているのでありがたい。隅々にまで目が行き届いているからこそできることなのだろう。

ところで、「衝撃の本」と本当に出会うのは、実は書店ではなく、読書行為そのものを通じてであることは言うまでもないだろう。たいていの場合、読書は自宅で行うことになるのだが、そうではない場合もある。

これはもしかしたら私だけなのかもしれないが、強く印象に残っている本と出会った場所（読んだ場所）は、家であるよりも、むしろ電車の中、カフェの店内、図書館の閲覧室……だったりする。そして本の内容だけでなく、その時の様子などまでもいつまでも覚えていたりする。

家にいるときはバタバタして読書に集中できなかつたり、あるいはリラックスしすぎて読書に集中できないことがある。つまり理想的な読書空間というのは、「ある程度の緊張感がありながらもリラックスできる場所」ということなのではないだろうか。

おそらくカフェというのはそういう空間なのだろう。中山手にあるCOR ENOZというカフェにはティー・アンド・ライブラリーという表示があるが、ここは本読みだけでなく本探しにも適した空間になっている。町の中の小さな図書館、小さな書齋といったところだろうか。

寺山修司は、かつて「書を捨てよ、町へ出よう」と書いたが、こんな風に言い換えてもいいかもしれない。書を読み、町へ出よう！